

脳卒中による死亡が 2030 年までに倍増

脳卒中は世界での死因の第 2 位（註：日本では第 4 位）であるが、これまで国や地域ごとに比較した研究はなかった。そこで、本研究では全世界を対象に、脳卒中の発生率や死亡率、脳卒中による障害や疫学的傾向について包括的な文献調査を実施した。

Medline、Embase などの利用可能なデータを検索し、119 件の文献（58 件は高所得国、61 件は低・中所得国）を対象に、1990 年、2005 年、2010 年における脳卒中の発生率と有病率、脳卒中による早期死亡と障害について、世界の 21 の地域ごとに検討した。

その結果、高所得国では、脳卒中の発生率、早期死亡率、障害発生率が過去 20 年間にそれぞれ 12%、37%、36%減少した。これはおそらく、禁煙や血圧コントロールなどの教育や予防処置の向上によるものと考えられる。一方、低所得国では、死亡率が 42%上昇し、障害は 46%増加した。これは非健康的な食事や高血圧、肥満、喫煙などの危険因子の保有率が高いことによるものと考えられる。また、今回初めて 20 歳以下の若年者と小児について解析することができ、1 年間に世界で 8 万 3,000 人超が脳卒中を発症していた（全脳卒中の 0.5%）。脳卒中患者の平均年齢はわずかに上昇したが、脳卒中による障害や死亡は、75 歳以上の患者より 74 歳以下の患者の方が多くなってきた。世界

全体での脳卒中の死亡者数は 26%増加し、2010 年には 590 万人であった。また、2010 年の初発脳卒中は 20 年で 68%増加して 1,690 万人、脳卒中生存者は 84%増加して 3,300 万人、脳卒中による障害は 12%増加して 1 億 220 万人であった。この傾向が続けば、脳卒中による死亡や障害は 2030 年までにおよそ倍増すると予測される。

出典：Lancet. Online Oct. 24, 2013, doi: 10.1016